HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナショナリズムの自己再生産に関する研究 : コミュニケーション・メディアとしてのネーションの可能性について [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	趙, 瀚雲
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第14418号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81292
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Zhao_Hanyun_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：趙　瀚雲

審査委員	主査　教授	鈴　木　純　一
	副査　准教授	金　山　　準
	副査　准教授	冨　成　絢　子
	副査　准教授	齋　藤　拓　也

学位論文題名

ナショナリズムの自己再生産に関する研究

―コミュニケーション・メディアとしてのネーションの可能性について―

本論文は、ナショナリズムに関する理論的な研究であるのみならず、先行するナショナリズム研究の再解釈も意図しており、このような事情から、きわめて抽象度の高い議論を展開している。それゆえ、先行研究の解釈における論理の厳密性、自説へ組み込む際の妥当性、論旨展開の整合性等が審査の重要な観点となる。その点、本論文は、先行研究に関し慎重かつ丁寧に理論上の特質と相互のつながりを跡付け、その意義を明確にしたうえで自説への関連付けを行っており、前提となる基礎的な課題は十分にクリアーされている。例えば、アンダーソンにおける「近代性と宿命性」という対概念の意義を、社会的コミュニケーション・レベルでの「相互作用」と読み替えることによって、近代の均質で水平的なメディア空間としてのナショナリズムが成立するメカニズムを説得力ある形で再構成している。また地域的・時代的な限定性を越えて、そのメカニズムの一般化の可能性を探るために、マクルーハンのメディア論における「技術と身体」という対概念を取り上げ、その相互作用を検討した後に、両者の対応関係を丹念に跡付けている。二つの理論の影響関係のみならず、それを超える構造的同質性を見出していくこのような手法も、本論文に対する肯定的な評価の根拠となった。また、従来のナショナリズム研究においては、ゼマンティク（意味論）の見地からも、オペレーション（機能構造論）の観点からもほとんど言及されることがなかったルーマンの社会システム論を理論的な根拠とし、コミュニケーション・メディアとしてのナショナリズム現象（「ネーション」）を分析し、先行研究の機能や意

味の読み替えを試みた点は、理論的にもまた研究方法においても画期的なことと考えられ、本研究のオリジナリティとなっている。この点に関しては、現時点においては理論的仮説の段階ではあるが、十分な首肯性と可能性が認められ、今後の本格的な実証研究が大いに期待される。論中においても、部分的ではあるが、EU の動向、グローバルな環境問題、自他境界線の再生産等、現代の特徴的な具体的事例との関連性を適宜検討している。

口頭試問による審査は、令和 3 年 1 月 13 日 13 時からオンラインで行われた。冒頭、筆者による論文の趣旨、内容に関する説明がなされた後、質疑応答へと移行した。最初に論文全体の構成、基本となる視点や扱われている理論の特質に関して質問がなされ、筆者から論旨を整理しつつ明快な回答があった。さらに、ナショナリズム理論史の要約と意味づけに対する妥当性や根拠、またそれら相互の関連性に対する説明が求められたが、筆者は従来の学説を継承した部分と独自に解釈した部分、オリジナルの部分を明確に分けながら説得力のある説明をおこなった。特に、社会システム理論の導入の必然性に関しては、現代情報メディア・技術の変化がもたらしたネットワーク・パラダイムという根拠から説明され、具体的事例とともに回答がなされた。続いて、アンダーソンからマクルーハンを経てルーマンに移行する理論的な流れの記述がやや晦渋で、わかりづらい印象を与えているとの指摘と、別の形での理論的組み立てや記述の可能性についての質問がなされた。これに関しては、いわゆるアンダーソンから抽出し、マクルーハンで一般化した「相互作用」としての観点を「コミュニケーション一元論」、すなわち観察のオートポイエーシスとしての見方へと回収していくことが、現時点においてもっとも説得力があり整合性のとれる理論的な解釈であるとの説明があった。また、ナショナリズム理論の読み替えの前提となっている現代情報社会の特性と根拠に関しての質問がなされたが、これに対しては近年の情報社会論における主客構造の流動化や自己言及化の指摘を例に挙げつつ明確な説明がおこなわれた。加えて、「相互作用」という概念の妥当性や「親和的」ということばの実質的意味、言い換え可能性についてのコメントと質問、本論と一見相反するようにも読み取れるルーマン自身の引用に対する解釈が求められたが、筆者は論旨に沿って一つ一つに着実かつ一貫性をもって回答した。

以上のような本論文への評価および口頭試問を総合的に考えれば、本論文は博士学位論文として十分な水準にあり、審査の結果、審査員全員一致で合格であると判断した。